

私の好きな十首

第157号（九月号）より

大平 千歳

寂しみて草取る畑にモンシロチョウ一頭来りてわれを離れず

河野 徳子

想い出は両手に余るほどになり八十五年の歳月を経て

江口マサミ

命日は六月一日なんとなく貴女らしいと線香あげる

岩崎勢津子

ものいへばあれこれそれでことたりてふたりに時はゆるゆる流る

太田美千子

霧雨に撫でられるように濡れながら寂しさ小脇に抱えて歩く

田中 靖人

要るかもという曖昧を手放して棚や抽斗にわたしが残る

柴田 秀子

さやうならを言つてないのに夫も猫もどこにもゐない 桜しらしら

藤田 正代

ほお寄せて糸切り歯もて繕いをしていし母を思い浮かべる

棚橋富美子

水色になれるといいねカラスさんそしたら遊ば幼な子の言う

原 純子

四歳のしんちゃん言葉の摩訶不思議とどめおきたしあれもこれもを

篠田 理恵

心が揺れる歌を選んだ。一首目、モンシロチョウは大切な人の魂なのかも。二首目、想い出は人生そのもの。三首目、貴女を想う気持ちが伝わる。四首目、夫婦の素敵な時間。五首目、この感性に脱帽。六首目、断捨離も決意が必要、同感。七首目、喪失感が伝わる桜しらしらが効いている。八首目、母上は今でも傍にいる。九首目、子供の発想は素晴らしい。十首目、大人には思いつかない言葉だろう、私も是非聞いてみたい。